

戦後日本における人間関係の変化

コミュニティ論を手がかりとして

社会学という学問の特性：個の総和を超越した『社会』の存在を措定する¹。

→「人の心は分からないが、人々の心は分かる」

個別の事柄に対する説明の力は必ずしも強くない（むしろ弱いかもしれない）。

* コミュニティとは何か？

コミュニティを科学的概念として精緻化する試みは Maciver を嚆矢とする。Maciver は、コミュニティを社会学の対象そのものとしてとらえ、社会・コミュニティ・アソシエーション・国家は明確に区別される必要があるとした。

「私はコミュニティという語を、村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指すのに用いようと思う。（中略）人間が共に生活するところには常に、ある種のまたある程度の独自の共通の諸特徴 - 風習、伝統、言葉づかいその他 - が発達する。これらは、有効な共同生活の標識であり、また結果である。あるコミュニティがより広いコミュニティの一部となったり、すべてのコミュニティが程度の問題であるということもあるであろう。（中略）その一方の極には人間の全世界がある。それは一つの大きいけれども漠然とした非統合的な共同生活である。他方の極は、普通の個人の生活がその内に営まれる狭小で集約的なコミュニティであって、ある時は広くある時は狭く、その外辺が常に変化するところの共同生活の極小の核である。（中略）このように生起する社会諸関係の無限の系列の中に、われわれは都市（市民）や民族や部族といったより集約的な共同生活の諸核を識別し、それらを<優れて>コミュニティとみなすわけである。」

Maciver にとってのコミュニティ：地域とは切り離すことのできないもの

Maciver の示す具体的な例示

communal な組織：都市・市民・民族など

associational な組織²：教会や労働組合・結婚（＝家族）

→ここで問題となるのは、コミュニティを考える上でもう一つの重要な要素である「共同性」の問題。コミュニティは「アソシエーションでは完全に充足されない、もっと重大な共同生活」である。

¹ 言い換えれば、社会学は、あくまでも集合的な現象を対象とし、個別の事情に関しては重きをおかない学問ともいうことができるかもしれない。

² マッキーバーは、アソシエーションを「特定の目的にしたがって結成された」ものとしている。

コミュニティの定義を分類し検討した Hillery は、94 の研究のうち、2/3 以上の 69 までが、社会的相互作用 (social interaction)、地域 (area)、共通の絆 (common tie) の 3 つをその構成要件としてあげていると指摘。

→ 共同性と地域性がコミュニティを構成する最低限の条件とされた。

* 日本社会はどのように捉えられたか

）神島次郎：自然村的秩序と擬制村

日本人の精神構造・思考パターンの原型を「自然村」的秩序に求め、明治以降の「近代化」過程の中で、形を変えつつその秩序が残され、また拡張されたと主張。

自然村的秩序の 5 つの原理： 神道主義（民間信仰としての） 長老主義 家族主義
身分主義 自給自足主義

→ 祭による共同体成員の情動的統合（ ） 年功的なシステムがもたらす保守性（ ） 同族的結合の重視（ ） 人格・家格・村格などの品格の連続性（ ） 自給自足がもたらす閉鎖性（ ） 等

近代化→近代都市の成立

→ 日本近代都市の特徴： 拘束の裏返しとしての「自由」、 奢侈と乱費、 不安定性
→ 都市における大衆化・原子化の進行

→ 社会的連帯や自律的な社会権力の成立が阻害され、解体されたばらばらな個人が存在する「群化社会」（神島）が現れる。

→ こうした状況の下では、近代的な社会ではなく、ゲマインシャフト（＝自然村的秩序）への回帰が望まれる³。

→ 近代化過程における「第一のムラ（自然村）」の崩壊と近代都市における「第二のムラ（擬制村）」の成立

）中根千枝：タテ社会の人間関係

日本社会の構成単位＝「家」⁴

構成単位としての「家」は個人を超越し、個人の権利は集団に従属し、集団内の個人にプライバシーは存在しない。

→ 「家」意識は、日本における集団（小集団）への意識の原型をなしている。

→ （小）集団：「仕事の協力」と「場の共有」によって定義される集団

→ 農耕（特に水田耕作）に基づく集団の特殊性

→ 集団から外れた個人は悲惨な扱いを受けるし、スタンドプレーに対しても否定的。

³ これは、ナチスドイツ研究に見られる論法に類似している。

⁴ ヨーロッパにおいて、社会の構成単位が個人“individual”＝「分割できないもの」であるのと対照的に描かれる。ちなみに、インドでは個人すら「分割可能なもの」として考える発想があると中根は指摘する。

70年代くらいまでは、日本の人間関係は、「封建的遺制」が色濃く残った、「前近代的」なものとして認識されることが多かった。

***高度成長期日本におけるコミュニティ論の展開**

）松原治郎

松原は、Maciver が前提としていた地域性と共同性の予定調和が崩れている現代日本においては、異なった形でのコミュニティの把握が必要であることを強調。

「一般に伝統的な地域共同体が崩壊してしまった今日、それに変わる地域社会としてのコミュニティはある意味では大きく二つに分解しているといっていよい。」

「大都市コミュニティ」：生産と消費の空間的分離を前提にして、生産点との距離（通勤距離・交易距離）を含んだコミュニティ

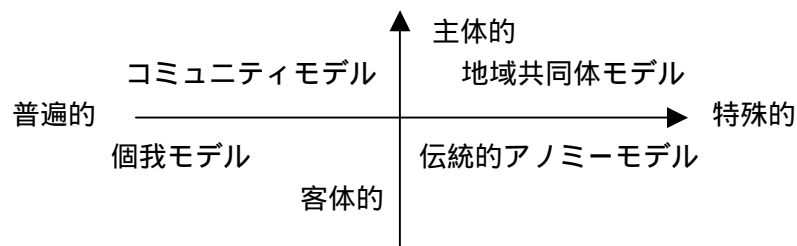
「居住地区コミュニティ」：消費しかも定住の生活を場にした日常の消費の、きわめて狭域なコミュニティ

「表現をかえれば、『大都市コミュニティ』は『夫・父型のコミュニティ』といえるだろう。それは仕事や社会参加の必要に応じて個人ごとに空間的にもかなり拡散する『異心円的コミュニティ』といえるが、それに対して『居住地区コミュニティ』は、『妻・子供・老人型のコミュニティ』であり、一定の空間的広がりを示すとしても、ある程度『同心円的コミュニティ』になり、一定の範囲に収斂する傾向を示すであろう」

）奥田道大

行動体系における「主体化 - 客体化」、意識体系における「特殊化 - 普遍化」という二つの軸によって、地域社会のモデルを4つに分類。

図1：奥田による地域社会モデルの類型化



	地域共同体 モデル	伝統的アノミー モデル	個我 モデル	コミュニティ モデル
住民類型	伝統型住民層	無関心型住民層	権利要求型住民層	自治型住民層
住民意識	地元共同意識	放任・静観的意識	市民型権利意識	住民主体者意識
住民組織	旧部落・町内会型	行政系列型	対行政圧力団体型	住民自治型
地域リーダー	名望有力者型	役職有力者型	組織活動家型	有限責任型

表1：4 類型の特徴

奥田のモデルは、「地域共同体」モデル→「伝統的アノミー⁵」モデル→「個我」モデル→「コミュニティ」モデルという、地域社会の発展過程を暗に想定している。

いいかえれば、日本におけるコミュニティ論は、伝統的社会が解体されることによって崩壊した「共同性」を、「地域」において再構築することを目的としていた。

→即時的ゲマインシャフトからゲゼルシャフトを経て、対自的ゲマインシャフトへ
(真木悠介)

この試みは、部分的には成功したが、大きな成果を得るには至らなかった。

かつては、コミュニティは地域性と共同性が不可欠の要素とされていた。

→いいかえると、かつては地域性と共同性は密着したものであった。

→農業技術が定住を可能とし、コミュニティを形成する基礎となった。

Bernard は、科学者のコミュニティ(協同世界)についても言及。

「その概念化においては、『協同的』要因ないしは組織化の要因が、地域性や情緒的紐帯ではなく、共通の知的ないし専門的紐帯であるような『統一性』が取り上げられている。」

テクノロジーの発達(主に交通・通信手段⁶)によって、コミュニティの条件として地域性が必要ではなくなっている。

→近代的コミュニケーションや輸送技術の発達が、コミュニティのあり方を大きく変えているし⁷、マスメディアの発達は、社会を「均質化」する。携帯電話やインターネットといったツールは、物理的距離を超えたコミュニケーションを即時に可能にする。

技術革新による空間の大きな変化

⁵ 「社会規範の変容、弛緩、交替などに伴って生じる社会的混乱の状態、ないしその結果である価値、欲求、行為などの不統合状態。...近代社会が個人の欲求の単なる解放のみならず、異常肥大化をも引き起こすさまざまな経済的・社会的な機制を持っていて、それがかえって個人に苦痛、緊張をもたらすことを指摘した点に、このアノミー概念の意義があるといえる。...現代に例を求めれば、一つは急速な経済成長期に生じる諸個人の意識における葛藤であり、欲求の水準が急速に上昇するためにかえって手段との間の乖離が増し、不満や挫折感を帰結しているような場合である。これはわが国の1960年代のいわゆる高度経済成長期にみられたし、しばしば先進諸国の中間階層の心理の基調をなしている。...その他、進学、職業的成功、地位獲得に向けて多少とも斉一的に成員の動機付けが成立している現代社会では、その競争的な目標達成行動の中で挫折者が析出され、多少ともアノミーの心理が醸成されるのが普通である」(社会学事典)

⁶ マッキーバーがコミュニティを著した1917年当時は、自動車や航空機、電信電話といった技術はまだ未発達であり、人間関係は地域と切り離すことのできないものであったが、今日では、携帯電話やインターネットなどの新技術が、地域を必要条件としないコミュニティの存在を拡大しているといえる。

⁷ 例えば、自家用車が未発達の段階では、生活必需品の購入は近隣の小売店で行わなければならなかったが、現在ではその必要性はなくなっている。